世界紀行文学全集 15

西アジア

修＝志賀直哉●佐藤春夫●川端康成●小林秀雄●井上靖

ほるぷ出版

世界紀行文学全集　第十五巻
西アジア

監修――志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖
発行日――昭和五四年九月一日　発行
発行所――株式会社ほるぷ出版
東京都新宿区新宿二-十九-十三　電話（〇三）三五四-七〇三一（代）
代表　中森蒔人
総発売元――株式会社ほるぷ
東京都新宿区新宿二-十九-十三　電話（〇三）三五六-六二一一（代）
製作――東京連合印刷株式会社

NDC 915.6

目

次

アフガニスタン
吉川逸治　アフガニスタンの遺跡……三
岩村　忍　アフガン・トルキスタン六千キロを行く……六
東畑精一　アフガニスタン日記……一〇
イラン
足利惇氏　ペルシアの旅……一八
笠間杲雄　ペルシアへ……二六　ペルシア皇帝と語る……四一
大宅壮一　イランを飛ぶ……四五
三笠宮崇仁　汚職天国・イラン……六二
イラン……六九
イラク
笠間杲雄　沙漠のあけぼの……八五
大宅壮一　洪水と沙漠の国・イラク……八八
三笠宮崇仁　イラクへ……九一
トルコ
黒板勝美　君斯担丁堡の形勝……一一〇
伊東忠太　小亜細亜見学……一一三
徳富蘆花　土京雑記……一一六
牧野英一　アクロポールに上る……一二〇　コンスタンチノープルに入る……一二三
セライの丘に立ちて……一二四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

市河三喜　晴子　イスタンプール……一二七
笠間杲雄　君府の想出……一二三
松尾邦之助　エユブ（ピエール・ロチの家）…一三七　イスミル紀行……一四二
島田巽　古くて新しい国……一四八
江上波夫　エーゲ海周辺……一五〇
大宅壮一　戦争の強い国・トルコ……一五四
村川堅太郎　イスタンブールの四日間……一五六
山下孝介　トルコの旅……一六一

イスラエル

徳富蘆花　昔々のふるさと……一七二
田中耕太郎　パレスティナ紀行……一八九
牧野英一　ダビデの塔……二〇四　テベリヤにやどる……二〇六
占部百太郎　カルメルの山……二〇八
大宅壮一　イスラエル紀行……二〇九
遠藤周作　ユダヤ王国・イスラエル……二一八
イェルサレム……二二二

シリア

伊東忠太　叙利亜沙漠……二三七
徳富蘆花　ダマスコ……二三四

占部百太郎　ダマスクス……二三八
笠間杲雄　沙漠飛行……二四〇
江上波夫　バールベックとパルミュラ……二四三
大宅壮一　革命の国・シリヤ……二四七
山下孝介　シリアを行く……二五〇

レバノン

占部百太郎　ベイルート……二五四
大宅壮一　近東の小国・レバノン……二五六
山下孝介　レバノンを行く……二五七
秦　厳夫　レバノン……二六一

ドック・リヴァー

ヨルダン

徳富蘆花　ヨルダン……二六三
占部百太郎　ヨルダン……二六九
山下孝介　ヨルダンを行く……二七一

アラビア

牧野英一　鬼ヶ島の町……二七五
高浜虚子　亜典上陸、アラブあわれ……二七八
野上豊一郎　アデン……二八一
牟田口義郎　サウジアラビア奇談……二八四　ハレムの話……二八七　右手と左手……二八八

アラブの異端児・ベイルート……二九〇　珍味佳肴……二九二
執筆者・出典一覧……二九五
地図　アフガニスタン、イラン、イラク、トルコ、イスラエル、シリア、レバノン、ヨルダン、アラビア、エルサレム市街図……巻末（折込）

西アジア

アフガニスタンの遺跡

吉川　逸治

アフガニスタンは、マケドニアのアレクサンダー大王のインド遠征と関連して生れたバルフ地方とカーブル地方のギリシア軍植民地、その後出現するバクトリアのギリシア王国、これが中央アジアから来住する蛮族に併呑されて、この地から西北インドにまたがるカニシュカ大王らのクシャーナ大帝国の出現など華々しい過去をもち、ことにこのクシャーナ帝国が、ペルシアを挟んでローマ帝国と結び、海路、陸路を通じて盛んに東西の貨宝を交換して、この時代に所謂ギリシア式仏教美術が最盛期に達したと考えられるので、魅力がある。だから、古代遺跡は、十九世紀初め以来、この地を訪れた冒険好きな西洋の旅行者、探検家の関心をひいたが、その組織的な調査は、この国が門戸をひらく第一次大戦後、一九二二年以来、フシェ教授、アカン博士などフランス考古学者の従事してきたところで、彼らは玄奘法師が昔旅して大唐西域記に記したカーピシー（ベグラム）、ヒロ（ハッダ）、バーミヤーンなど主な遺跡とその周辺を発掘調査して、発表している。日本人で始めて、昭和七年、この地を踏査したのは、美術研究所の先輩、故尾高鮮之助氏で、次いで昭和十三年、仏教美術研究家の山本智教氏がカーブル、チャリカールを踏査されている。私も昭和十四年九月、アカン先生の推薦によって当時カーブルにおられた守屋和郎公使の取計いで、パリ留学よりの帰路、この地に立ちよることが出来た。コロンボで下船し、インドを汽車で縦断し、北西端のペシャーワルの町にたどりつき、ヨーロッパの戦雲急をつぐる情勢下に、一週間ホテルにとじこもって、ようやくインド出国許可とアフガニスタン二週間の滞在の入国査証をもらい、この町を後にハイバル・パスにむかって出発することができたのだった。ハイバルの隘路は名にしおう天下の険、太陽の熱光にやく裸の山岳の間の渓谷を縫ってアスファルトの道二条が蛇行する。自然にすてられた岩山を征服しようとする人間の意志力の細々とした象徴のようだった。隘路（ゴージュ）を出ると、ほっとしたように緑が見える小さな平地があらわれる。

彼方に、末はインダス河に注ぐカーブル川が三四本の剣を横たえたように夕陽に輝いていた。道は国境から舗装されない、凸凹道になって、私を雑貨類と一緒に運ぶ公使館のフォードはひどくゆれる。アフガン人の運転手は私とは一語も通じないから、黙りこくってかまわず走らせる。夕闇のうちに、三蔵法師のナガラハーラに相当するジェララバードの町にはいる。もうすでに暗い。石油ランプをともした宿屋兼飯屋の前に止って、運転手はしばらくどこかへ消える。この町の手前数粁の台地が、美しいギリシア式のスッッコ像が夥しく発掘されて名高いハッダの遺跡である。その仏頭のいくつかは岡部子蒐集ですでに東京でも見ていたし、パリのギメー博物館に沢山の作品がきている。帰ってきた運転士にハッダ、ハッダと連発して、ここに泊ることを手まねでやって見たが、ドアをあけてのれという。動き出すと町を出て、大きな並木のある夜道をひとしきりとばして、やがて大木立にかこまれた平屋建てのホテル風の家の前につく。出てきた男とかろうじて英語で話すと、前世紀の王のニムラ離宮址で、今夜はここに泊るのだと。ヘッドライトに、銃をかついだ兵卒二人が木蔭に照し出される。護衛兵、国営のホテルだからだという。石油ランプを前に羊の肉と羊の脂でいためた飯の御馳走である。自分の影を大きく壁に写すカンテラの火をけして、蚊帳をくぐって鉄寝台に横になった。夜は冷々としてきた。朝は実にすがすがしい。空気が恐ろしく乾燥しているから、空はまっ青だし、遠くの赤裸の山々がくっきりと見える。大木が行儀よく並んで、その間に空っぽの池が三つ段をなして築かれている。木の根には水溝が掘られていて、水がどんどん流れ、高い囲壁の下から出てゆく。この国では、樹木は家畜のように人間の手で生え、育つ。道の並木の高さに二段、三段の差があるのに気づいた。それぞれが有力な二三の王者の治世に相当するのだそうだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ハッダはもう遺跡はふたたび埋められ、見せないという（宗教上の理由とのこと）、カーブルに直行した。進むにつれ、山地はますます乾ききって、もう貧弱な灌木も草もなくなってゆく。ことにカーブル盆地に入る長い高峻な峠道のあたりは、百年余り前、厳冬の雪中、英印軍の大軍がアフガン人ゲリラ部隊に全滅させられたというだけあって、荒涼たるもので、それにこんな高地なのに海辺や川床のように砂礫の地層に驚く。太古、この地が海底であったのが、地殻の大変動の結果、大山脈となり、取残された海水は処々の山ぶところにたまって塩湖を段畑のように作っていった。やがて海水は乾上りところによっては塩を散したように塩類が白く敷かれた不毛の高原が残されている。カーブルの北のチャリカール盆地では、フシェ教授がいっているように太古の湖の水面がはっきりと痕ずけられる。この盆地の四つの赤褐色の山々は、中腹に線でもひいたように、同じ高さのところから急に稍々なだらかな砂礫の白黄色の斜面となって、湖底であった細土の平らな地面に降りてゆく。だから、ここかしこで、袴をはいたような山に気づく。また、冬四ヵ月雪でおおわれるこの国は、春は川に水溢れ、秋にいたっても山麓の泉や渓流はたえない。だから山麓に木が育ち、村落が育つ。

ペグラム（カーピシー）の遺跡は、都カーブルと峠一つへだてたこのようなアフガニスタンとしては肥沃な盆地の一隅、カーブルから四十哩ほどのチャリカールの町の南、ゴルバンド川をへだてた台地にある。昔の都の範囲は、城壁の痕を示す南北にある土地の隆起ですぐわかる。周囲には樹木が茂り、耕地もあり、玄奘三蔵が大唐西域記に「宣穀麦多果木、出善鬱金香」と記した当時の事情は十分に推察されるし、続いて「異方奇貨多聚此国」と述べていることにいたっては、一九三七年、三九年のアカン博士の発掘がみごとに証明したところである。アカン夫人の洞察眼は、この台地の南の一隅、城壁に近い地域を目ざして、一連の厚い壁にかこまれた室を掘出し、その第十番目の部屋から夥しい古代の東西の優秀な美術工芸品を得たのであった。西方ローマ世界から齎らされたガラス器類、青銅製品類、石膏、蠟石器類とインド伝来の象牙品類、それに若干の漢代の漆杯を。これらの諸室は、カニシュカ大王らクシャーナ帝国三代（二世紀中頃から三世紀中頃まで）の夏都の王宮の一部だったと認定され、この時代の東西交易の活発さがよくうかがわれる。ペグラムの遺跡には、このカニシュカ時代のカーピシー都址とその前後の都址が相重なってあとづけられ、第一のカーピシー都址はギリシア・バクトリア諸王時代に溯り、第三のカーピシー都址は三世紀中頃から五世紀初めまで存続したと推定されている。この第三カーピシー時代に相当する付近のショトラックの丘腹の仏寺遺跡が発掘されて、いくつかの片岩のガンダーラ式浮彫が出土している。これらのなかに、私が特に興味をひいたのは、すでにギリシア式の典型を著しく中央アジア化しているものがあることで、同様のことがカーブル付近の一仏寺遺跡テペ・マレンジャンから掘り出されたスッッコ像についても窺われるのである。この遺跡も夥しい四世紀のササン貨幣が伴出して、ショトラックと同時代のものであることが推定されている。この中央アジア化の傾向は、西北インドからギリシア式仏教美術をうけいれたクシャン人が、自分らの仏教美術を作り出そうという意図から産み出したものではないかと想像するのである。この地の雄大な自然に接し、アフガン人の剛健な野性にふれると、そう考えたくなる。この意図は、しかし、五世紀、白匈奴に徹底的に荒されたアフガニスタンの南部では実現されなかった。ヒンズクーシュ山中にあったバーミヤーンの小天地で実現されたのであると思う。中央アジア化の傾向は、ペルシアのササン帝国が、カニシュカらの帝国を滅ぼして、古代世界の商業路からクシャン人を絶ちきった時に一段と促進されたものらしい。バーミヤーンの仏教美術はササン美術の影響、さらに西方、シリアの影響が強く反映してギリシア式仏教美術の伝統を変化させて、中央アジア的要素も時折り生のまま形をあらわしている。しかも、土族芸術の臭味はなく、気品と雄大さがある。

チャリカールの町はずれの北側の岩壁の裂目からゴルバンド川は流れ出てくる。川に沿うて黒い岩膚の絶壁の間の隘路を溯ってゆく道が、古来のインド世界と中央アジアを結ぶ主要幹線の一つなのである。暗緑色の水面は巨大な蛇の背のようにうごめき、斜めに平野の光をうけて

きらめきながら底知れぬ力をたたえて流れ出る。数百米で隘路を抜けると、やや谷が開けて、水流も緩やかに、処々荒石の転ぶ川原に木が繁って、桃源郷のようである。この六十哩余の長い細いゴルバンド川の谷間に沿うて、フランスの考古学者たちを北に運ぶ二台の六輪トラックに私はバーミヤーンまで便乗させてもらった。車には冬を北アフガニスタンで過すための食糧や衣類がシャベル、ツルハシなどと一緒に積みこまれている。野砲の牽引自動車とかでこうして試験しているとか。途中で駱駝と騾馬をひきつれた古風な隊商の群にあう。日の傾く頃、行手に白い絶壁が見えて谷が閉ざされる。崖の中途に大穴があって、白緑に輝く水が滔々と流れ落ちている。ゴルバンド川はここから始まるのだった。車は斜めに絶壁をよじ上って、見ると広々とした平原がなだらかに起伏しながら、赤い夕陽を浴びて砂を輝かして続いている。シバルの峠と聞いて待ちあぐんでいたのが、これだというので驚いた。川水はもうインド洋には注がず、カスピ海にむかって流れる。やがて道はまた急坂を下って、シカリの隘路に入る。絶壁の間で、道にせまる岩壁は特に狭く、帯のように薄暗い谷間から空の光が見える。隘路を出て、まっ直ぐにバーミヤーン川に沿うて北に降ればバルフ、マザリ、シェリフの町々にむかうので、途中道の両側の斜面には仏寺の廃墟や町跡がかなりあるらしい。バーミヤーン川の湾曲にしたがって左に折れて、川上に溯れば、バーミヤーンの里にたどりつく。途中は相変らず荒涼たる渓谷で、左手、谷にせまる赤紫色の山の突出部にシャール・イ・ゾハクの古城の廃墟がそびえる。イスラム時代の城で、山の泥土で作った日焼煉瓦と荒石がきずいた壁や穹窿は大半は崩れ落ちつつも、まだ処々に残って過去の威容をしのばせる。昔の中央アジアに向う幹線路がここを通り、バーミヤーンにいっていたのだし、ここで他の一路が直接山越しにカーブルに通じているのだから、要路の城塞だったわけで、山二つに跨る規模を見ても、当時の交通の重要さが想像される。この城も、バーミヤーンのイスラム時代の城と同じく一二一二年ジンギスカンの軍勢に徹底的に壊されたところだった。バーミヤーンはこの城から十マイル足らずのところで、谷は左右の崖の間に懐のように拡がって、黄ばんだ麦畑や草原があり、四方高い壁にかこまれ、望塔を前後にもうけた小城のような民家が点在する。バーミヤーンの谷間は、昔から隊商の泊り場として無二の場所だったろう。北の断崖に南面して、三十五米と五十三米の大石仏が東、西に刻まれ、その周囲に二千余の洞窟が掘られ、その多くは仏教時代に溯り、今なお仏堂や僧房のあとをよく止めているのも多い。壁画の断片も処々に見出される。五十三米という、形の整った堂々たる巨像を造営させた王者はだれだろう。小野玄妙博士がカニシュカ大王に帰している説も、一概に斥けがたい魅力がある。あるいはササン帝国の一領主が仏法に帰依して造らせたのだろうか。この地の壁画、仏洞の装飾の優れたものは、(勿論、出来の悪いのは沢山ある、けれど、下らぬ物に標準をおくのはこまる)とうてい地方芸術と見なしえない世界的水準にある。

バーミヤーンから西にむかうペルシア国境に通じる山道に沿うて、四十哩、いく度か階段状に高原をのぼって最後、白や黄、エメラルドの山膚をした山頂の峰々の麓の裂け目にアミールの堤とよばれるまるでアラビアン・ナイトの光景のような奇景に遭遇する。九つのまっ白な石灰石の自然の大堤にせきとめられて、九つの湖が相連続してたたえられている。こんな清らかな水は見たことがない。ペルシア陶器の藍色のように透き通っていて光のとどくかぎり奥まで見え、藻草の間に遊び泳ぎまわる無数の魚が、光を反射して美しい。この山の湖で、私のアフガニスタンの旅も終点までいったわけだった。

(昭和二十八年)

アフガン・トルキスタン 六千キロを行く

岩村　忍

鬼気せまるバルフ廃都

カブールを出て北に向け三時間も自動車を走らせるとチャリカルという町に着くが、そこからヒンズークッシュ山脈に入る。チャリカルから西に折れて三千メートルのシバル峠を越してから本道を外れ三〇キロばかりで有名なバーミヤンの大石窟につく。バーミヤンには五三メートルもある大立像とそれよりすこし小さい立像と無数の石窟があるが、山西省の雲岡の石窟寺に比べては破損の程度もひどく石窟も小さく到底雲岡の華麗さとは比較にならない。バーミヤンにつく二キロほど手前に孤立した相当高い丘があり、その上には大きな城の廃墟がそびえている。十三世紀まではバーミヤンは相当な町であったが、ジンギスカンによって破壊された後、昔日の面影はなくなった。この巨大な城も蒙古軍によって破壊されたままである。そして皮肉なことには、ジンギスカンの指揮下にあった蒙古人の子孫というハザラ族がこの付近に貧乏な農民として現在も生活している。会ってみるとハザラ族はたしかに蒙古人的な顔をしていて、イラン的なタジック人やプシュト人とは全くちがう。ただし彼等はすべてペルシャ語を話している。

ヒンズークッシュ山脈を越えると急に眼前が開け、突如としてトルキスタンの大平原が眼前に展開する。この大平原はアム河まで続き、そこでソ連領トルキスタンと境界を接している。この平原には草原も、サバクもあるが、水利のよいところはなかなか豊かで、米、綿花を産する。プリ・ホムリには紡績工場があって、ドイツ人技師の指導によって相当成績を挙げている。プリ・ホムリからさらに北に進むと、すばらしいイスラム寺院のあるトルキスタンの中心地マザリ・シャリフにつく。ヒンズークッシュ山脈を越えて先ず気がつくことは、ソ連の商品が多いことである。ヒンズークッシュの南側では石油はアメリカ品織物と、陶器は日本品が断然多い。ところが北側では石油はソ連品、織物、陶器、砂糖もソ連製である。アム河があるだけで地形からいってもソ連領トルキスタンとの交通は極めて容易であるから、これも当然であろう。

マザリ・シャリフのすぐ西にあるバルフは有名な古都である。訪れてみると森閑としたさびれた人口千人程度の小さな町である。ゾロアスター教の開祖ゾロアスターはバルフの出身である。寺院の跡を訪れてみると、そこには半農半牧のトルコマン人が住んでいた。バルフはアレキサンダー大帝が西暦四世紀にペルシャ王ダリウスの姫ロクサナと結婚したと伝えられている。しかしアレキサンダー時代の遺跡は何もない。ただアレキサンダーの部下のギリシャ人が建てたバクトリヤ国王の古貨幣が時々発見されるだけである。バルフは十三世紀に蒙古軍によって破壊されるまでは繁栄した大都市であった。中世のバルフの廃墟は今の町のすぐ近くにある。高い城壁に囲まれた巨大な遺跡で、中心部には高い丘がある。その面積からみて、おそらく十万以上の人口をもっていたにちがいない。荒れたこの廃都の中を歩いていると真昼のまぶしい日光の下でも鬼気、人にせまるものがある。八百年後の今日も破壊されたままで、紺青や緑のうわぐすりのあるカワラの破片がいたるところに散乱している。クツ先ですこし地面を掘ると陶片のようにもろくなった骨が出てくる。バルフは歴史上で余りに有名な所だけに、来てみてそのさびれ方には強く心を打たれた。

政府専売の特産羊皮

三月の終りはカブールでもまだ寒く、ヒンズークッシュの山々は雪に被われているのに、トルキスタン平原に入ると、日本の七月の気温である。四方に丘一つ見えない大草原を西北に向って道路が走っている。マザリ・シャリフから西方一五〇キロでシバルガンという町に出る。この辺の町は大抵オアシス都市である。河はすべて海にはけ口を持たない内河で、アム河に合流するか、あるいはサバク中に消えてしまう。オアシス都市はこのような内河の水利の便のあ

る地にある草原に車を走らせていると、時々こんもりした森が見える。そこには町がある。シバルガンはマルコ・ポーロがうまい果物と野鳥の多い美しい町と書いているが、まさにその通りである。こういうオアシス都市以外の草原には、ウズベック、トルコマンなどの遊牧民が遊牧している。時には数千頭以上の羊群を率いて歩いている。有名なアストラハン羊皮はこの辺の羊皮である。

アフガニスタンではアストラハンはカラクリといわれている。これが本当の名で、昔アストラハンを経由して欧州に輸出されたので、アストラハンの名で通るようになった。カラクリ羊皮はアフガン政府の専売で、政府の重要な財源の一つだということである。この羊を生きたまま国外に輸出することは厳禁されている。この辺の遊牧民の大部分はトルコマン人で、その外にウズベック人もいるが、後者はむしろオアシス農民の方が多い。たまにはアラビア人だという者もいるが、言葉はペルシャ語を話している。農業は水の多いところではカンガイする小麦（ガンドン・アビ）、水のない傾斜地では水をやらない小麦（ガンドン・ラルミ）を栽培しているが、後者の方がうまいといわれている。西のこの辺にくるともう稲はほとんど見受けない。

シバルガンから北西に向って六〇キロほどのアンドホイはソ連国境に極めて近い。ホテルは郊外の麦畑の中の高い丘の上にある。このような平原にぽつんと高い丘があるのは不思議で、多分クルガンとかテペとかいう古代からの住居跡か城の跡であろう。夜ベランダで米と羊肉を油でいためた有名な中央アジア料理パラオをランプの光で食べながら、ふと北を見ると、付近は一面のヤミなのにかなり大きい光が見える。この辺には電灯がないから、光は多分ソ連領の光であろう。アンドホイから国境まで二〇キロもない。夜半けたたましい野獣の叫びに驚ろかされた。シャカルのほえ声である。シバルガンとアンドホイの間は三〇キロの完全なサバク地帯を横断しなければならない。この間はほとんどジープの四輪運転で突破しなければならなかったほどのひどいサバクである。しかしこんな荒れ果てたサバクにもタルバガン（モルモットの一種）と二尺ぐらいの大トカゲをしばしば見かけた。

アンドホイから南西約一五〇キロでマイマナにつく。この町のあたりからようやくまた山路になる。マイマナの北はバンデ・トルキスタン山脈になる。この山脈はさほど高くはないが、その山中はアフガニスタンでも最も未知の地域の一つで、蒙古物語を話す部族がいるといわれている。マイマナについて早速聞いてみるとモゴール族の村が近くの山中にあるというので行くことにした。ジープでも到底通れないので、しかたなく行ける所まで行って、近くのウズベック人の村で馬を借りて一〇キロほど乗ってカタカラという村についた。この村に外国人がきたのはわれわれが最初だといっていた。この村民は冬は土で作った谷底の家に住み、春になると羊と山羊をつれて山腹に登り、テント生活をする半農半牧の民である。カタカラの人達は蒙古型も強く出ているが、しかしかなりアフガン型も混ってはいるが、しかしかなりアフガン型も強く出ている混血民であった。そしてついに蒙古語を話す人は発見できなかった。ペルシャ語とプシュト語が話されている。しかし彼等は自分たちはジンギスカンの蒙古人の子孫だと称していた。

咲き誇る高山植物

マイマナから八時間走ってバラ・ムルガーブという小さな町についた。途中は樹木の全然ない低いハゲ山つづきである。たまに遊牧民のテントを見るのみである。この間、一台のトラックに会ったのみである。この辺の西側は一帯の山脈で、そのすぐ向側はソ連領である。バラ・ムルガーブは最も国境に近い町で、ソ連領まで一〇キロしかない。町といっても、付近の農民や遊牧民が週に二度の市場日に麦や羊を売り、日用品を買いにくるバザール（市場）があるだけのことである。バラ・ムルガーブはムルガーブ河というかなり大きい河のそばにある。この河はソ連領にはいってメルヴに達しているが、ソ連領ではこの河にダムを建設中だといわれている。

つぎの町はカレ・ナウでここで二晩を過し、ガソリンを補給してパロポミサス山脈に入った。この山脈はそう高くはないが、山脈中に南北に走る深い峡谷のある見事な大高原がある。高度は約千五百メートル、赤、紫、黄の高山植物が一面に咲きほこっている。この高原の南端が二

千四百メートルのサブズ峠で、中々の難所であるが、不思議なことには、この峠の付近にのみジュニパーの森林があって美しいながめを展開している。頂上近くのジュニパーの大樹の木陰で休んでいたら、羊飼が冷たいすんだ水を持ってきてくれた。羊の皮の袋に入れている。聞いてみると山かげの雪だという。トルキスタンの旅行中、三週間、毎日白く濁った水ばかり飲んできた私には冷やした白ブドウ酒よりもうまく感じられた。このサブズ峠は五月中旬から八月中旬まで三カ月間しか通れないそうで、つい一週間ほど前に、今年初めて峠路が開かれたばかりである。一年の中の他の九カ月はヘラトとカブール、マザリ・シャリフ、マイマナなどの間の交通はヒンズークッシュ山脈南側のカンダハル経由の回り路によるほかはない。

こうしてほとんど四週間を費してアフガニスタンの西端、イランに近い古都ヘラトについた。ヘラトは美しい緑の町である。京都や北京を思わせる。美しいモスク（回教寺院）があり、付近に遺跡が多い。全体としてイラン的である。言葉もカブールその他、東のペルシャ語とはすこし違う方言を話しているが、大きな相違はないようである。ヘラトはこの平原の中心地であり、カブールに匹敵する都市ではあるし、イランとソ連に近く、政治的にもすこぶる重要な所である。しかし農耕地帯の中心地というだけで、見るべき産業もなく、生活程度も低い。ヘラトはとくに賃金が安く、働くにも職がないそうである。私が泊った政府経営のホテルはなかなか立派で、部屋の洗面器にも水が出るので驚いて水道があるのかと思った。ところがそうではない。ホテルの屋上にタンクがある。このタンクに水を揚げるために常時一人の労働者が雇われていて、この男がマシュクという羊の皮でつくった皮袋に付近の水利溝（ジューイ）から水をくんでは運び上げるのである。大変な労働であるが、月に一四〇アフガニ（一アフガニは約一〇〇円）にしかならないそうである。

ヘラト付近に来て初めて西アジア、中央アジアの有名な水利設備であるカレーズを見た。非常な乾燥地帯ではジューイという普通の水利溝では貴重な水は流れている間に大部分蒸発して消えてしまう。そこで地下に水路を掘って水を引いているので、これをカレーズといっている。相当の技術と大変な労働力を必要とする施設である。この方法は西アジア、中央アジアでは非常に古くさかのぼるものらしい。書物ではしばしば読んでいたが、実物を見て初めてその重要さが理解できた。野蛮人がオアシス都市に侵入して、カレーズを破壊したために全く廃墟と化したという記事を読んだことがあるが、なるほど大規模なカレーズは一度破壊されたら手のつけようがなくなるにちがいない。ヘラトに一週間いた後、再び同じ道を東に向ったが、トルキスタンの夏はもう始っていて、草原の旅は炎熱地獄である。蚊も出てきて、マラリアにも用心しなければならない時期になった。

百キロのサバクを横断

ヘラトから再びほぼ同じ道をとって引き返し、アフガン・トルキスタンの首府マザリ・シャリフについたのは五月三十一日であった。我我の旅行の最難所は何といってもマザリ・シャリフ東方のタシュクルガンからクンドウツまで約一二〇キロにわたるサバクと草原の横断路である。この一二〇キロのサバクの中で一〇〇キロの間は完全に人家も水もない。この地方の日中の温度は四十五度を越す。それで午前四時にマザリ・シャリフを出発した。タシュクルガンを出たのは六時、それから一時間ばかり車を走らせてサバクの入口の小部落に並んで茶を飲み、いよいよサバクに入った。

南には低いエルブルツ・コー山脈のハゲ山が連なっているが、北方は広々とした平原、地平線に何一つ眼をさえぎるものもない。この平原はアム河の岸まで続いている。東方にも全く何も見えない。午前九時にはもう暑さがたえ難くなった。しばしば皮袋の水でノドをうるおした。砂とトゲのある野草のみである。タルバガン（草原に住むモルモットの一種）とトカゲさえ余り姿を見せない。地図の上では道路はあるが、道路といっても前にラクダとトラックが通った跡のみで、到底道路というようなものではない。

しばらく行くと放牧中のラクダを数頭みつけた。そのうちに数頭のカモシカが車の前を横切った。車で追いかけると捕えることができると聞いていたが、暑さと疲労で到底そんな余裕はない。ただ一刻も早くこの荒れはてた炎熱地獄を脱したい一念のみである。はるか東に山が見

えてきた。この山の低い峠を越すと、もう一つこんどは非常に急な坂を上り頂上に達すると、はるか東方にこんもりとした緑の森が見えた。クンドウツ河岸である。峠を下ってクンドウツに近づくと今までの荒れ果てた地帯とは打って変って至るところに水流があり、青々と樹が茂り、水田がある。家屋の構造もトルキスタンとはちがってきた。マザリ・シャリフ以西では壁も、屋根もすべて土か、レンガであるが、このカタガン地方に入ると屋根はカヤぶきである。風景も遠くから見るとちょっと日本の農村を思わせる。今まで五、六週間もひどい乾燥地帯ばかり旅してきた私にはすこぶる懐しい。まもなくクンドウツ河を渡る。ヌリスタンの高山の雪どけの水で河はみなぎっている。この河はアム河に注ぐ内河ではあるが、なかなか大きなものである。

クンドウツは綿花と米の一大中心地で、大きな紡績工場がありなかなか繁華な町で、にぎやかなバザールもある。しかしクンドウツの町がこのように発展したのは二、三十年来のことだという。それまではクンドウツは極めて貧弱な農村に過ぎなかった。この付近一帯は大森林地域で、森林中にはトラ、ヒョウ、イノシシなどがいた。アフガニスタンのことわざに「死にたければクンドウツに行け」というのがあるそうだ。それほど不健康な低湿地で、野獣が横行していたという。それが水利の改良と綿花、米の栽培で現在はカタガン地方の経済的一中心地に変化した。この地の綿花は品種が優良で、日本へ輸出している綿花の大部分もこの地方の産である。クンドウツの古い村を訪れた。新興のクンドウツ町に接しているが、貧弱な回教寺院を中心に数十戸の農家があるに過ぎない。しかしそのすぐ傍らで意外なものを見出した。深い堀をめぐらした巨大な城市の遺跡である。堀の水は今はなく、底は麦畑になっているが、十数メートルの深さがあり、幅も同様である。城市の遺跡は周囲の土地より数メートルも高く、城壁でかこまれ、門跡も東西に各一つ見られる。トルキスタンのバルフの城跡に較べると小さいが、それでも現在のクンドウツの町よりははるかに大きい。聞いてみると、この城市も蒙古軍によって破壊されたと伝えられている。中国の史料によると、蒙古軍はこの地方で塔里寒という大城を攻略したと記されている。塔里寒はタリカンで今でもクンドウツの東の地域はタリカンと呼ばれ、クンドウツから東に約六〇キロの地にタリカンという町もある。私はタリカンの町にも行ったが、その付近には大きな遺跡はない。従ってこのクンドウツの遺跡が中国の史料に見える塔里寒に当ることはほぼ疑いがないと思われる。

夏は最上の遊牧地

クンドウツからタリカンまでの間にはハーナバードというやはり米と綿花の集散地があり、収穫期には大きな米の市場が立つそうである。ハーナバードの付近から東はクンドウツ河の流域の幅の広い峡谷でよく耕されている。しかしこの付近からしだいに高原の様相を呈して、パミール高原のすそらしくなる。タリカンからクンドウツ河に沿い、さらにコクチャ河の岸を東へ進んだ。これらの河はみなアム河に合流して、結局はアラル海に注ぐ。南にはヒンズークッシュ山脈の四五〇〇メートル以上の高峰が見えてきた。もちろん白雪におおわれている。峡谷はしだいにせまくなってきた。キシムというカタガン州とバダクシャン州の境界の村に一泊した。この村はコクチャ河岸にある。ほこりにまみれた身体を洗うために河岸に出た。水に足をつけるとしびれるように冷たい。ヌリスタンの高山の雪どけ水である。翌朝午前六時にキシムを出発して、さらに東に向った。道はすこぶるわるい。ジープがかろうじて通れる程度である。雪どけの時期なので、狭い峡谷の水位が高くなり、道路上に三〇センチ以上もの深さの水が流れているところもある。峡谷の左右の急な山腹には所々にエケ・モゴール族やウズベック人やタジック人の部落が見える。このエケ・モゴール族は名前はモゴールだが、実は全くチュルク系の部族であって、蒙古人ではない。この辺にくると住民はもうほとんど遊牧民ではなく、農耕民で、山羊を飼っているにすぎない。

九時間ほどひどい道を走り、午後三時ごろようやくはるか東の峡谷にこんもりとした森が見えた。バダクシャンの首府ファイザバードである。ここはもう完全にパミール高原のふもとである。ファイザバードはコクチャ河のガケに沿った細長い美しい町である。暑いトルキスタン草原の旅を続けてきた私には、この高原の冷気

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com